Open Campus

中央大学をもっと知りたい皆さんのために
オープンキャンパス 模擬授業

◆多摩キャンパス（文系学部対象）
7月17日（日）・7月31日（日）・8月7日（日）
◆後楽園キャンパス（理工学部対象）
7月24日（日）・8月6日（土）・8月7日（日）

次回予定

■多摩キャンパス（文系学部対象）
11月3日（木・祝日）～11月6日（日）
模擬授業は11月5日・6日のみ
■後楽園キャンパス（理工学部対象）
11月4日（金）～11月6日（日）
模擬授業は行いません。

Open Campus

政府の役割とは何か？

法学部　**工藤裕子**　教授

教室を埋めた高校生や保護者らが、事前に配布されたレジュメに目を通しているなか、「政府の役割とは何か？」をテーマにした工藤先生の模擬授業は東日本大震災の話からはじまった。

多岐にわたる政府の役割

「復旧計画や復興政策、それに仮設住宅の建設をするのは政府の役割です。それだけでなく児童や生徒の受け入れ、就職斡旋なども政府の役割です」。大震災発生後の政府の役割が、復旧・復興の計画・政策だけにとどまらず、被災地のインフラの整備や教育、就職斡旋など非常に多岐にわたっていることを、まず先生は説明した。

先生は次にオバマ米大統領の政権二年間に言及。そのなかで健康保険制度改革に対し国民の反対が多かったことについて、「日本では国民皆保険がほぼ実現されています。しかし、アメリカで過去実現されてこなかったのは、個人の健康は自己の責任という考え方が徹底していて、社会が保障するという日本における認識とは違いがあるからです」と指摘し、アメリカと日本の政府の役割の違いを解説した。

そのうえで「政治学は政治現象を理論的に説明し、行政学は政府はどう運営されているのかを学びます」と政治学と行政学との違いを分かり易く話した。

夜警国家から歴史的に変遷

続いて政府の役割の歴史的変遷に移り、先生は、「夜警国家」、「福祉国家」と「小さな政府」、「経営」国家の3つの段階に分けて、講義をすすめた。

第一段階（1800～1930）の夜警国家では、政府の国民生活への介入はなく、自由放任国家などと称された。第二段階（1930～1990）の福祉国家では、産業革命による都市化で政府がインフラ整備や社会保障などあらゆる分野に介入。しかし行政機関や政府予算の拡大を招き、結果として財政赤字を引き起こした。そのために民営化や規制緩和による「小さな政府」（1980～1990）によって修正された。

第三段階（1990～）の「経営」国家について先生は、政府だけでなくNPO、ボランティア団体、企業

などによる「ネットワーク」が、従来は政府が供給していたサービス・財を供給すると説明した。

そして「市場の失敗」を是正するため政府が介入する「規制」について、大きくわけて社会的規制と経済的規制があるとしたうえで、政府は規制と規制緩和の間をシーソーのように動くと説明。現在は喫煙規制や飲酒規制など、政府がさまざまな分野に介入してきていると指摘した。

工藤裕子教授

今後の政府は「経営」国家へ

最後に工藤先生は、イギリスのキャメロン首相が掲げた「ビッグ・ソサイエティ」を取り上げて、政府のありかたについて「最終的にはNPO、ボランティア団体などを総動員した『経営』国家にならざるをえないのではないか」として、今後はこれまで政府が担ってきた役割の一部を民間企業やNPOに委ね、相互に協力しあう「ネットワーク」の構築が進むとの見解を示した。

（学生記者　荒木求＝文学部1年）

Open Campus

観光と環境の両立を目指して ～世界遺産から考える～

経済学部　薮田雅弘 教授

模擬授業開始15分前にも関わらず8307教室は、ほとんど満席に近くなっていた。高校生らがノートを開くなど、おのおの準備をして授業の開始を待った。

「経済学部は、市場メカニズムが現在どのように機能しているかを扱う学問です」。薮田先生は、こう口火を切って授業をはじめた。経済学の基本について需要供給曲線のスライドで説明したあと、授業は本題の「観光と環境保全の両立は成り立つか」について入った。

CPRsの管理・運営について

まず、薮田先生が取り上げたのは、環境問題へのアプローチのひとつである「CPRs」についてだった。CPRsとは所得・階級に関係なく万人が所有する財（コモンプール財）で、誰かが利用することにより他の誰かが利用しにくくなるという性質を持つ財であるという。森林、川、海などがこれにあてはまる。

先生は、「CPRsは市場に任せていると劣化が進み、価値を失っていく」として、その環境保全には公共政策の役割が重要になってくることを指摘。「公共政策は、文字通り市場の失敗を〝公〟または〝共〟の力で正す方法です。政府の法令による公的な働きかけだけでなく、地域レベルでの活動も大切です」と述べ、CPRsの管理・運営には地域ネットワークの形成が重要であることを強調した。

例えば、観光産業が盛んなAという島があるとする。そのA島は観光による自然破壊が著しいため、対策として入島規制や入島税を設ける。これが公共政策のポピュラーな型だ。ただ、先生は、旅行会社はじめ観光業に関わる地元住民らは経済的に不利益を被ることになり、規制や課税への反発が起こる側面があることも指摘した。

薮田雅弘教授

世界遺産の環境保全について

ここで薮田先生は、観光業とも密接に結びついているユネスコが定める世界遺産の環境保全について話を移し、「日本においては屋久島でのゴミの不法投棄による自然破壊が問題となっています。地元住民からは規制を必要とする声も上がっています」と具体的な例をあげた。

現実に観光客による環境破壊の例は後を絶たないという。とくに自然遺産は人間の侵入による影響を受けやすい。自然遺産であるガラパゴス諸島では、生物種の減少が顕著で、観光客数の増加が直に環境に影響を及ぼしたケースだ。

そこで先生は、「CPRsは、誰かが得をしているとき誰かがその財を享受しにくくなる財で、その代償は常に自然が負う」として、CPRsの最適資源管理の在り方に言及した。

キャリング・キャパシティについて

先生が重視していると紹介したのは、「キャリング・キャパシティ」だ。キャリング・キャパシティとは、森林や土地などに人手が加わっても、その環境を損なうことなく、生態系を安定した状態で継続できる人間活動、あるいは汚染物質の量の上限を意味する。

最後に薮田先生は、「環境の力、観光の魅力を生かしながら、まずキャリング・キャパシティを理解する必要がある。マーケティングはそのあとに行われる」と述べ、環境保全に対する認識を深める必要性を強調して、授業を終えた。

（学生記者　鈴木あきほ＝法学部2年）

Open Campus

ヒット商品を生むためのネーミングとキャッチフレーズ

商学部　**飯田朝子**　教授

「ヒット商品を生むためのネーミングとキャッチフレーズ」。この身近なテーマに魅かれた高校生たちが、大教室を埋め尽くすように集まった。日頃、何気なく手にするひとつひとつの商品と言葉の関係はどのようなものなのだろうか？そんな強い関心が授業開始を待つ教室全体を覆っていた。

受講生もネーミングに参加

「ようこそ、暑いなか中央大学に

飯田朝子教授

いらっしゃいました」と笑顔で受講生を迎え、飯田先生の講義は始まった。先生の専攻は言語学で、日本語と英語の比較対象研究や日本語の数え方について研究している。また、1～4年生を対象に、商品のネーミングに関するゼミを開講している。

「皆さんは、何かものを買う時、商品の名前をどの程度考えていますか。まず、商品名は私たちの消費行動に影響を与えるのかについて検証したいと思います」。講義は、受講生に易しく話しかけるようにしながら、進んでいく。

そこで具体的な例にあげたのが、桃屋の『辛そうで辛くない少し辛いラー油』という商品名。先生は「皆さんが、桃屋の商品名をつける会議にでていると思ってください」と受講生に自ら考えることを促す。この商品は、具入りであることと、あまり辛くないという特徴があるという。それを端的に消費者に伝えるにはどうしたら良いのかを考える。

商品名が消費行動を誘う

まず単純に『具入りラー油』という商品名をつけたとする。このラー油は辛いものが苦手な人でも食べられるため、それを強調したいので、これだと物足りない。次に出たのが、『辛そうで辛くない具入りラー油』。「これも悪くはないですね。でもこれだと、辛いものが好きな人が買わなくなるかもしれません。少しは辛いのです」。

それで考え出されたのが、『辛そうで辛くない少し辛いラー油』で、それが商品名になった。先生は、ひとつの商品名が生まれる過程をこのように説明し、「この矛盾を含んだ長い名前は、思わず消費者にツッコミを入れ、興味を持たせ、商品棚に手を伸ばしたくなる戦略になっています」と解説した。

また、CM等のキャッチフレーズも消費行動に影響を与えると、先生は解説。ハリウッド俳優のジョーンズさんが宇宙人として出ていることで有名なBOSSレインボーマウンテンのCMで使われるキャッチフレーズ「このろくでもない素晴らしき世界」を例にあげた。

このCMは、コーヒーではなく、コーヒーを飲む世界観を提示しているのだという。「世界がくだらなく感じて疲れていても、このコーヒーを飲むことで、新しい世界に誘われることを想像させます」。

画像をふんだんに使って講義

この後、先生は特定の受験生などを狙った商品名や企業名を印象づけるコピーなどについて講義。画像をふんだんに使い、丁寧に語りかける先生の授業は、分かり易く、興味・関心をそそり、飽きることがなかった。

飯田先生のゼミでは、ヒット商品のCMプランナーやコピーライターを実際に招いて、研究している。受講した高校生たちは、この模擬授業を通して、大学入学が大いに楽しみになったに違いない。

（学生記者　堀滝登＝文学部4年）

Open Campus

「ひきこもり」を社会学から考えてみる

文学部　**矢島正見** 教授

若者を中心に社会現象にもなっている「ひきこもり」がテーマとあって、教室には保護者同伴の高校生たちが目立ち、身近な家庭の問題として関心の高さをうかがわせた。

「大学の授業とは、研究者である先生の言うことを疑問視することです」と中学、高校の授業との違いを指摘して、矢島先生は本題に入った。

矢島正見教授

「心の問題」と「関係の問題」

まず、「ひきこもり」の原因言説について矢島先生は、「『心』の問題と、『関係』の問題とする視点がある」と解説。『心』の問題とは、無気力、耐性の欠如、過敏な性格など「傷つきやすい心」や「優しい心」と結びつけて「ひきこもり」を理解する視点であり、『関係』の問題とは現在の青少年の対人関係性から「ひきこもり」を理解する視点だ。

とくに『関係』の問題について、矢島先生は「今の若者たちは対人関係スキルが低下している。友達同士ではうまくおしゃべりできる人でも、異年齢の人や自分と異質な人に対しては途端に話ができなくなる」という一般的な見方を紹介したうえで、「本当に今の若い人は対人関係スキルが低下しているのだろうか」と疑問を投げかけ、授業の内容を別の視点に振り向けた。

昭和30年代（1960年前後）の集団就職期、地方から都会に出て来た青少年は、「初対面の人とうまく話せなかった」と述べて、「対人恐怖症は以前からあったこと。実際は今以上に昔の若者の対人関係スキルは低いと思われる」と強調した。

「ひきこもれる時代」と「ひきこもりが問題となる時代」

そして矢島先生は、現在は「ひきこもりの時代」であり、それは2つの面をもつ、と述べる。まずひとつの面として、「ひきこもり」は①豊かな時代で、②ひきこもれる場所があり、③ひきこもりを援助する人が存在するという「ひきこもれる時代」だからこそ出現しえるのだ、との考えを示した。

またもうひとつの面として、「高度な対人関係を必要としなかった第一次産業や第二次産業から、営業中心・サービス業中心の第三次産業へ日本の産業構造がシフトし、そこでは入社したての若い社員にすら高度

な対人関係スキルを要求する」という「ひきこもりが問題となる時代」だからこそ「ひきこもり」が騒がれる、と解説。現代社会では対人関係が企業の業績を左右するため、企業は若者に高度な対人関係を要求し、できない人に対して落ちこぼれのレッテルを貼り、それによって若者はひきこもってしまう、と指摘した。

最後に矢島先生は「現代社会では自分を見つめる時間がなくなりつつあるので、自分自身を見つめる独りだけの時間をつくることが大事です」とアドバイス。時折、冗談を織り交ぜつつ、終始和やかな雰囲気の50分の模擬授業を終えた。

（学生記者　野村有希＝経済学部1年）

Open Campus

イスラーム世界を読む

総合政策学部　清水芳見　教授

『イスラームを知ろう』（岩波新書ジュニア）をはじめ、イスラーム教について数多くの著作を出版している清水先生。アラブ諸国以外の地域のイスラームに興味を持ったのは、後に一年間フィールドワークを行うことになる東南アジアのイスラーム王国、ブルネイを初めて訪ねたのがきっかけだったという。授業は、そうした話からはじまった。

自分の目で確かめることが重要

フィールドワークを行ったのは、「自分の目で確かめること」にあったという自らの体験を通して、清水先生は現地に行って事実を確かめることの重要性をまず強調した。その例として、長い内戦の末、ことし7月に南スーダンが独立した北アフリカのスーダンについて、「スーダンは『黒人の国』という意味なのに、内戦はアラブ系と黒人系の対立という誤った報道がある。そういうこともあるので、（世界を読むには）現地に行って自分の目で事実を確認してほしい」と指摘した。

そうしたうえで清水先生は、「イスラームがどういう宗教で、どうしてこんなに世界に広まったのか」について話を進め、イスラーム教が世界に広まった要因を5つあげた。

イスラーム教が世界に広まったのは？

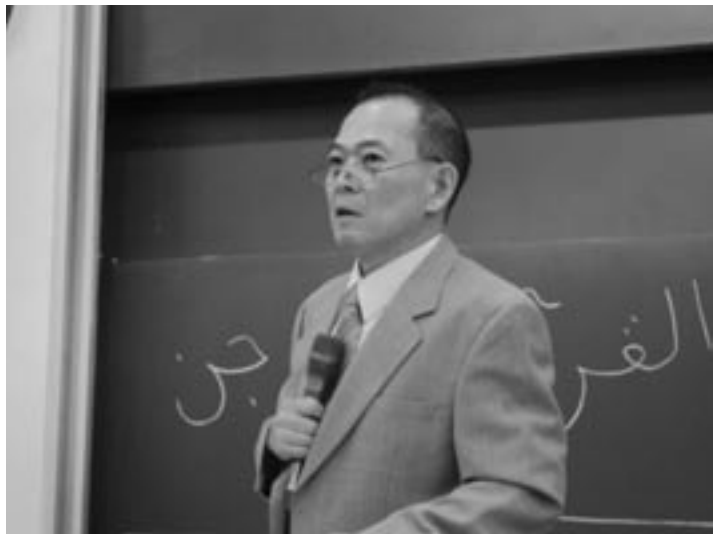
一つは、他宗教からの「改宗が簡単」であることだ。イスラーム教は二人以上のイスラーム教徒の前で、アラビア語で信仰告白をすれば改宗できる。

二つ目は、「徹底した平等主義」だ。イスラーム教には厳密には聖職者がいない。したがって神の下では誰もが平等だ。例えば、モスクで礼拝を指導するイマームは、「別に偉いわけではなく、イスラームについて詳しい人が、知らない人に教えてあげるというような感覚」という。

三つ目は、「分り易い契約思想」だ。1日5回の礼拝と、喜捨と断食で知られるイスラーム教は、神との契約という思想が非常に強い。

清水先生は、「ブルネイでは断食を破ると、罰金を取られ、ラジオで名前を放送されます」という話を紹介。「現地の人が、（ラジオで名前を言われる）あれは恥ずかしいと言っていました」という話を披露すると、会場からは笑いが起こった。

四つ目は、「戒律の寛容さ」。一見厳しいイメージのあるイスラーム教だが、実はそれほど厳しくないという。例えば、イスラーム教では、最後の審判の日に善行と悪行のどちらが多かったかで、天国か地獄行きかが決まる。これは万が一悪いことをしてしまっても、その後の行い次第



清水芳見教授

自らの体験を語った。ここでも先生は、現地に行くことで、通説とは違う面が見えてくることがあると強調した。

最後の五つ目は、アラブの「ジン」という妖怪だ。ジンは、アッラーが煙のない火から作った生物で、ジンという妖怪の存在も「イスラーム教の拡大に大きな役割を果たした」という。そこで先生は現地で集めたというジンの絵を見せてくれた。ジンの姿は様々な容姿をしていて、絵柄も漫画チックなものから、単なる棒人間にしか見えないものまでいろいろある。

偶像崇拝の禁止で絵画発展せず

「ジンがどういう姿かクルアーン（コーラン）に記載されていないことが、イスラーム教が広まっていく過程で有利に働いたのです」と説明した清水先生は、これに関連して「偶像崇拝が禁止されているイスラーム世界では、絵画がほとんど発展しなかった」とイスラーム文化にも言及して、授業を締めくくった。

（学生記者　堀滝登＝文学部４年）

で許される寛容な宗教であるということだ。

イスラーム教の世界では棄教は死を意味するといわれているが、先生は「イランでは厳しいが、東南アジアの国ではイスラーム教から改宗したと平然という人がいた。国によってこうも違うのかと驚かされた」と

Open Campus

「進化多様性生物学」
―生物多様性の歴史を探る―

理工学部　**西田治文** 教授

理工学部オープンキャンパス初日の7月24日、後楽園キャンパスには好天も手伝って数多くの高校生が訪れた。大学の講義に直接触れることができる模擬授業は、高校生には人気の催しで、生命科学科の西田先生の模擬授業の教室は、開始10分前には早くも満席で立ち見が出るほどの盛況ぶりで、とくに女子高校生の姿が目立った。

地球と生物の変遷を考える

西田先生はまず、「生物は時間、空間をへだてて変化してきている」と述べたうえで、「地球と生物の変遷を考える」ことのきっかけとして、今年1月に植物化石の研究のためチリの南極調査チームに参加した体験談を交えながら、授業をすすめた。

地球と生物の変遷を考えるために西田先生が例にあげたのは、ナンキョクブナの分布。ナンキョクブナは現在、南米南部、タスマニア島、ニュージーランド、ニューカレドニアなどのオセアニア地域に隔離分布している。

西田治文教授

いた。

この謎は大陸移動説と化石の研究から解明できる。一連の研究でわかったのは、オーストラリアやニュージーランドと南米とが南極をはさんでかつてはつながっており、共通した生物がいたことだった。「南極と南米も9000万年前にはくっついていた。ところが7000万年前に南極と南米が離れはじめ、その後、南極が凍りついてナンキョクブナは南極では絶滅したんです」と西田先生は説明した。

先生は「ナンキョクブナの実は鳥が食べず海水にも弱いので、海を隔てた移動はできない」と解説、「この分布の起源が長い間謎だったのです」と述べて、高校生らの関心を引

南極で「ゴミ化石」を採取

先生が、チリの南極調査チームに参加したのは、南極で「ゴミ化石」を探すのが目的だった。「ゴミ化石」というのは先生の造語で、たくさんの植物片が含まれている化石のことだ。南極でそれが見つかれば、かつて南極が温暖であったときの豊かな生物相がわかる。「ゴミ化石を調べることにより、当時の生態系を詳細に知ることができるのです」と先生は強調した。

南極での調査は、天気が悪く、目的地までヘリで移動しても、1日中テントの中で過ごす日が何日も続くことがあった。苦労の末、木の幹や葉の化石を見つけることができたという。これは現地のメディアにも報道され、注目度の高いものになった。

生物多様性が安定した環境保証

授業の後半で先生は、生きるためにはエネルギーが必要だという生物の特徴に触れたうえで、「生物を支える代謝のもととなる有機物の生産を保証するのは安定した環境と生態系なのです」と力説。ただ、近年の地球温暖化と自然破壊で、安定した環境が危機に瀕していることも指摘した。地球上の生命を維持しているもとは光合成なので、生態系が壊れると人類もただちに脅かされることになる。先生は「生物多様性が安定した環境を保証している」と述べ、生物多様性の重要さを強調した。

最後に「生命科学の分野はまだ分からないことだらけです。皆さんが生命科学科に入られたらやりがいのある4年間を保証します」と、聴講した高校生に生命科学科をさりげなくアピールして、授業を締めくくった。生命科学科に魅力を感じたのか、講義終了後、女子高校生が直接、西田先生に質問する姿がみられ、それに先生は丁寧に答えていた。

（学生記者　田中佑樹＝理工学部2年）